

新庁舎に関するシンポジウム議事録

令和2年12月6日（日）

14:00～16:30

ラディアン・ホール

1. あいさつ

2. 新庁舎建設町民ワークショップにおける各班成果発表

A班

（町民パネリスト） A班は11月8日（日）のワークショップに参加しております。参加者は町の職員2名を加え、合計12名で意見を出し合いました。メンバー構成は20代から70代の方まで幅広い年代の方が参加されていて、引っ越して間もない方から生まれた時からずっと二宮町に住んでいる方まで、様々な方がいらっしゃいました。当日のまとめにつきましては、お手元の資料A班のページをご覧ください。

1 ページ目は①現地における災害リスクと新庁舎の場所についてです。

こちらは災害時の想定と平時の利便性を見ながら、様々な意見が出されたものです。

具体的な建設地としては、災害時の浸水リスクを最大限に考慮すると、A班の中でラディアンよりも少し高さのある果樹公園の跡地のところが良いのではないかという意見視点が最も多くありました。また大震災を被災した時のことを考えると、国や県からの支援がスムーズに受けられるよう、緊急輸送路に指定されている県道71号線に接しているラディアン周辺に集めるのがベストというような声もありました。一方で、ラディアンや法務局へのアクセスのしやすさ、また果樹公園の取得費用が掛かるということも考慮すると、第一駐車場も候補になるのではないかという意見もありました。ただ、いずれも浸水の可能性の問題もありますので、その点についてはピロティ、高床式の方法を用いる等の対策、県の葛川整備の協力、情報共有の必要性があるのではといった声もありました。他の場所としては、やはり浸水リスクや利便性を考慮すると、駅前をもっと活用するべきではないかという意見もあり、町民会館跡地の駐車場や、小中一貫校が実現するのであれば空くことになる学校を活用するべきではないかといった意見もありました。

続いて、②未来に向けて求めたい庁舎機能やサービスについてです。今後、少子化やデジタル化がますます進んでいくと考えられる中で、大きく立派な庁舎をという意見はなく、必要な機能を整理した上で、必要最低限な設備や柔軟性のある庁舎をというのが大きな考え方かと思います。例えば、壁の無いフロアで今後の環境の変化に対応できるようにしたり、一部を木造にすることにより初期費用を抑えて不要になった部分を将来的に壊せるような造りにする等というようなアイデアもありました。

資料にもいろいろな案がありますが、これを機にデジタル化を進めるべきだという

意見が多く出ていました。ただ一方で、デジタル化についていけなくなるのではと心配されている声もあります。年齢や障害等を含め、多様性を考慮し、デジタルとアナログを柔軟に選択できるようにするべきといった声もありました。また窓口を担当する職員の方から、現状、顔を合わせて相談したいという方も一定数おり、デリケートな相談には呼吸を合わせるように相談に応じているので、何でもデジタルというのは難しいのではないかとのことです。

その他具体的なことは資料をご覧いただければと思いますが、現在の庁舎で不便に感じている点や改善してほしい点、例えば保健福祉部門をまとめて欲しいであるとか、少し閉鎖的に感じるのを明るい庁舎にしてほしい等といった点については反映されていくと良いのではないかなと考えています。

③ラディアン周辺のまちづくりについては、町民が訪れたいくなる、愛着を持って過ごせる場所の整備と一体で庁舎の整備を行ったらどうかといった意見があり、特に自習場所や、ワーキングスペースの充実を求める声が多くありました。ラディアンにはラウンジがあり、自習や打合せに利用している人もいますが、他の自治体では庁舎を夜間に開放する取り組みもあるそうなので、夜間利用も含め検討する等、使い易いスペースを求める声があります。その他、多世代に渡って様々な町民の交流が進むようなところ、広場や景観に配慮した場所になってほしいといった声も聞かれました。これに伴い、北口商店街の活性化にも是非繋げていきたいであるとか、近接する花の丘公園では、連携する機能を向上してほしいという意見もありました。現在、防災公園になっていないと問題視している方もいて、防災について学べるような公園であっても良いのではないかという意見もありました。また、その際には周辺の交通渋滞対策をしっかりとしてほしい、また車だけでなく徒歩で移動される方々も多くいるので、利用者全体の利便性にも考慮してほしいというような声がありました。A班の意見については以上になります。

私自身、二宮町に引っ越してきて間もない組で、町の運営には特に不満がある訳でもないけど期待もしていないというような層でした。ただ、今回のワークショップに参加させて頂き、非常に良かったと思いますし、どの方も本当に将来を見据えて、様々なことを考えて発信されていると感じました。予算も限られている中、誰もが納得するものを形にしていくことは難しいと思いますが、今回のように町民の方の声を上手く集めて反映し、出来上がりを見た町の皆さんが知恵と工夫に富んでいるなと思って頂けるようなものが出来たら良いなと思っています。

(町民パネリスト) ワークショップに参加して、町民の方の思いがとても強いと感じました。町の方から用意して頂いた資料を超えた意見と言いますか、様々な意見が多種多様に、盛んに出てきまして、ほぼ全ての方が自発的に発言されていて、庁舎の問題について強い思いを持っていると感じられました。それだけ注目されている懸案事項ということだと思のですが、今日、一つの節目を迎えスタートする形になると思います。この問題の着地点が定まっていないので、みんなで引き続き注目していき、より良い結果を導き出せたら良いと感じています。

B班

(町民パネリスト) お手元の資料 5~7 ページのワークシートがB班の内容になっています。

まず①現地における災害リスクと新庁舎の場所についてですが、今回のワークショップでは 17 名程の人数で協議をしたので、そのままが良いという方もいれば、第一候補に挙がっている第一駐車場に新設した方が良い等といろいろな意見が挙げられました。当然、第一駐車場に建てたとしても、ラディアンだけでは車を吸収しきれないので、新たに駐車場も必要になってきます。そして今、冬場にある「菜の花ウォッチング」の臨時駐車場として第一駐車場を活用していますが、それが無くなると大変混雑してしまいます。そういうこともあり、果樹公園を駐車場として新設した方が良いのではという意見もありました。ラディアンと公園と新庁舎、この3つが非常に近接した形で連携するようになった時に、どれだけ二宮町の「まちづくり」にインパクトを与えることが出来るのかということも、③の方でも改めて述べさせていただきます。

災害リスクという点では、葛川が氾濫すれば 100%庁舎の方で受け止めることは不可能です。当然、周辺施設で吸収してあげることも含めて、被害を軽減することを考えなくてはいけない。その様な意見も、お仕事でランドスケープデザインに従事している方からありました。庁舎の下に貯留浸透施設ということで、今の建物は大体コンクリートで固められている時代ですが、地下水が流れづらくなっているため、地下に水を落としてあげるような設備を造れば良い。貯留タンクを設けて水圧や水頭の高さを使って上に水を上げてやったらいい等、個人的にも興味深い、非常に有意義な議論が出来ました。

②の未来に向けて求めたい庁舎機能やサービスについては、我々の班は現庁舎の悪い部分がこういう風だったら良いのにという意見が多くありました。昭和 53 年に竣工した庁舎なので、法律に適応した形で設備を更新しているといっても、当然限界が出てきますので、やはりこれからの庁舎には自然の光を取り入れ明るくしたり、最新のバリアフリーに適応した設備であってほしいという意見もありました。

窓口サービスに関しても苦勞される方もいると思われるので、そういったところも一元化、ワンストップ窓口でやって頂けないかという意見も挙げられました。環境に関しても再生エネルギー、太陽光や地熱を使って自然に優しい、CO2 の排出等といったところを極力抑制したような設備であってほしいという意見もありました。

デジタル化に関しては、分散化してアプリを活用するというのもあるのですが、IoT を利用した情報通信によりリモートの形を重視すべきという意見もありました。また、これから行政サービスがデジタル化により変化していった時にも、ハードは予め充実しておいて、後はソフトの入れ替えだけ、更新だけできちんと機能するように、追従するようにといった提案がありました。

スマホの時代になってきて、二宮町専用のアプリ等から手続きが出来るようになってくると非常に利便性が良くなり、分散やデジタル化が上手く連携できるような機能やサービスがあれば良いということで、非常に多くの意見が挙げられました。

最後に、③ラディアン周辺のまちづくりについて、二宮町の将来都市像は人と暮らし、文化を育む自然の豊かな町ということです。第一候補である第一駐車場に新庁舎が出来上がったとして、ラディアンと公園と庁舎が三位一体となれば、二宮町のシンボルとして非常に強くなるのではないかと思います。

当然その中でコミュニティが生まれて大きくなり、町全体が盛り上がるでしょうから、そういった二宮町の中心拠点の拡充が、求められるところなのかと思います。

駅からここまでのアクセス等、北口商店街も頑張ってもらわなければいけないし、公園で子ども達も遊べ、庁舎にオープンテラスみたいなカフェがあれば親達はコーヒーを飲みながら子ども達を見ることが出来ます。子ども達にも優しく、親達ものんびり出来るような利用価値のある周辺の施設、地域になっていくのではないかなと思います。

ただ一方で、庁舎が出来たからといって、二宮全体が盛り上がるという訳ではありません。我々も町がより良くなるよう協力しなければなりませんし、例えば官民一体となって、駐車場を運営する等といったことで財源を確保するなど、二宮町の経済全体の底上げを狙っていく必要があると思います。

最後にこのワークショップを通じてですが、私は二宮に来て7年目になります。

この庁舎移転の話は、広報等を通じて拝見しており、単純に建てれば良いと思っていたのですが、やはりなかなかそういう訳にはいかないかなと今回、改めて知りました。当然、町の拠点を動かすというのは、そこで執務される方や利用者のインパクトも出てくると思います。町全体の事を把握して検討しなければいけない、勉強しなければいけないと思いました。

こういった意見を出し合う場に参加させていただき、なかなか経験出来ないことをさせて頂きました。一日でも早くこの基本計画が立てられて竣工に近づけられるように、これからも頑張りたいと思います。

C班

(町民パネリスト) 私は既存施設を活用したらいいと基本的には考えていますが、今日は班での報告をさせて頂きます。当日の参加者は町職員2名を含めて11名ということでした。詳細についてはお手元の資料をご覧頂いて、私の方からはポイントだけお話をさせて頂きます。

最初に、①現地における災害リスクと新庁舎の場所についてですが、あえてリスクのあるラディアン周辺にするべきではないという意見と、対策をとれば問題ないのではないかという両方の意見が出ました。具体的な場所としては第一駐車場との意見がありました。更に人口減、財政減の中、庁舎だけでなく町全体のあり方を考えるべき

ではないか、民間活力を生かしたらどうか等という意見もありました。

次に、②未来に向けて求めたい庁舎機能やサービスについてですが、保健センターについていくつか意見がありました。保健センターは駐車場が少なく交通の便が悪いという利用者の声をたくさん聞くと、そういう意味では是非庁舎に入れて欲しいとのことでした。それから子育てと障害や介護等、単体では無くて複数の課題を抱えている方、それと最近困難ケースの相談が多いということで、それぞれ部署ごとではなく、相談機能を一か所にまとめて欲しいという意見もありました。一方、高齢化やデジタル化が進む中では、一か所集中では無く、地域で身近なところで相談が出来る場が必要なのではないかという意見や、分散も考えるべきだが集約も必要、特に突発的な大災害時には集中して対応できる場所が不可欠である等のご意見がありました。

③ラディアン周辺のまちづくりについてということですが、やはり子どもから高齢者まで、多様な人たちが自然に集まれる様な魅力ある場をつくるということが大事ではないのかというご意見が多くありました。具体的には花の丘公園や果樹公園等、公園が単にあるということではなくて、少し機能を高めて例えば健康づくりの場等、目的意識的に少し使えるような、そういうような声もありました。

あとは、そこに行くと時間が潰せる、フリースペースがある、コンビニ等ちょっとした買い物出来るような場所があるといい、というようなご意見もありました。

最後にこれからというよりは、やはり現庁舎が非常に暗いので、照明をLEDにしたらどうなのかというご意見を頂きました。確かに空調も壊れていて、少なくとも4年は今の庁舎を使うということもありますし、議員からは人権問題だというご指摘も頂いている訳なので、来年度の予算でLEDや空調を改善するようにお願いをしたいと思います。個人的にはホテルを1億円で買えるのだから、是非そちらにお金を回して頂きたいというのが私の思いです。

今回、ワークショップや専門家の方々のお話を伺った訳ですが、これらを生庁舎の構想を作る前に行っていたら良かったのと思ってしまいます。もう少し時間を掛けて、調査や研究を積み重ねて丁寧な議論をしていたら、計画変更や白紙撤回や議会の否決等ということは無かったかもしれなくて、この2年間をもっと有意義に使えたのではないのかというのが、このワークショップに参加しての正直な感想です。

逆に言えば、せっかくこういう場を作り専門家のご意見を頂いたのだから、これを契機に次に向けて行って頂きたいです。もう一つ気になっている点は、ワークショップの資料に、このワークショップが終わったら来年1月に庁舎の基本計画案を出しますと書いてある部分です。今言ったように議論はまだまだこれからですし、いろいろなご意見が出たので、1月に庁舎のみの基本計画案はあり得ないと私自身は非常に感じました。

国はどんどんデジタル化を進めていく訳で、やはりそれを踏まえながらこれからの公共サービスを町としてどういう風にするのかということ整理しないと、役場の役割機能みたいなのは見えてこないと思います。それにラディアン周辺を町の核にということでしたので、どのようにこの周辺をつくっていくのかという構想に、ラディア

ンの改修計画も控えているので、それも併せてお示しして頂くことが大事かと思いません。それから学校の統廃合についても、今年度にラディアンと学校の建物の調査が終わるといことなので、その結果を踏まえて是非、今まで個別に進めてきた計画を一度、同じテーブルに乗せて、どのようにまちづくりを進めて、庁舎、学校、ラディアンをどう活用し配置していくのかということを考えて頂きたいし、今がその時期かと感じています。

(町民パネリスト) 生まれてからずっと二宮町に住んでいます。感想だけですが、私は小田原市に務める公務員として東日本大震災を経験しました。発災の直後、役所は機能しません。約1時間後にいろいろなことを必要とされる方が少しずついらっしゃるのですが、大体2、3日後から稼働すれば充分かなと思っています。新庁舎の場所に関しては、被災者の対応やボランティア、救援隊の受け入れといったものが必要になるので、ラディアン裏で構わないと思いますが、広い場所が必要だと考えています。

機能面の要望ですが、町役場は憩いの場になって欲しいと思っています。今日も花の丘公園で子どもが遊んでいたりと、ご老人の方が散歩されていますが、そこに町役場が出来る事で、新しいスペースが生まれると思います。そういった場所で学生が勉強したり、子育て世代といった方も何かしらで集まれる余力なりを自分たちが提供できるような、そういう場を作って頂ければと思います。

子ども達や老年の方々にフォーカスされがちな役場ですが、全ての世代、若い世代も活躍出来るような役場を造って頂きたいと思っています。また、こういう場合は職員がないがしろにされがちですが、職員が一番頑張ってもらわないと良い町は出来ません。役場としては、行き過ぎないけれども、ある程度誇りの持てる華美なもの、町民が誇れるもの、そういった施設を造って頂きたいなと思っています。

3. 専門家の先生方のご紹介と、新庁舎の基本計画に向けてのポイントについて

加藤 孝明先生

東京大学生産技術研究所 教授／社会科学研究所 特任教授

私は、ご紹介にあったとおり「防災」の専門家と見られていますが、本来的には「まちづくり、都市計画」の専門家という位置づけです。

今日お話しするのは、ワークショップに先立つ1回目の講演で皆さんにお話した内容のダイジェスト版としてポイントを絞ってお話しします。

キーワードとしては「防災のまちづくり」という発想が必要であり、反対語としては「防災」だけということになります。

今の時代は二つの絵（潮流）であらわすことができると思います。

一つは社会制度の慣性の法則です。この図（日本の1人当たりGDP推移とインド・韓国・台湾の水準（2008年）の比較）は一人当たりのGDPです。戦後右肩上がりになってきて1990年頃のバブル経済崩壊とともに急激に安定成長・低成長時代に時代が変わってきています。

ところが、社会には物理学でいう「慣性の法則」、要するに大きな船は急に曲がれないという状態があります。その結果、時代との間にギャップが存在しているというのが、今の状態です。これからの時代は、このギャップをできる限り小さくしていくことが必要とされています。私達は常にこのギャップを意識して変わる必要があるというのを頭に置いていくことが重要かと思えます。

その時に重要なことは、何事も根本に立ち戻って考えていくことです。さらに、ある種の素人感覚・町民感覚が重要です。プロの人達というのは昔のことをちゃんと知っていますので、ついつい昔のことをベースに発想しがちです。今回のワークショップもそういうことかなと、思っています。

もう一つは、これは行政のかかわりの絵ですが、「昔の縦割り」は経済も社会も成長していましたので風船のように膨らんでいました。ところが「今の縦割り」は、ボトルの首のようになっています。お金もない、人も少ない中で、かつて膨らんでいた行政が必要最低限のことしかできなくなっているというのが今の時代です。今の問題としては、ボトルの首と首との間にスキマが存在しています。このスキマをいかにカバーしていくのが、今の社会の大きな課題です。

この答は二つしかなくて、一つはこのスキマを行政以外の何かで埋める。これは町民であり、共助といわれるものであると。もう一つは、目的を多目的化していくこと。

例えば防災対策だが福祉にも役立つ、福祉対策だが防災にも役立つというようなことによりこのボトルの首を太くして行って、その結果この首のスキマを小さくしていく。これが「防災」だけではなくて「防災のまちづくり」の発想の原点の一つでもあるということです。世の中、総合的に考えていくことがますます重要です。

そして、最近の防災意識の変化についてお話します。自助、共助、公助は防災で良く出てくる重要なキーワードです。東日本大震災以後に大災害に対して公の限界があるから自助、共助、公助が必要と言われていますが、実際の社会の動きは逆になっています。自然災害からの安全は行政が確保しなければならないという、逆の雰囲気があります。これは正しい方向性ではなく、本来は公の限界があるので自助、共助、皆で力を合わせてやっていく。今一度この原点に戻って考える必要があります。

二番目として、問題のバランス感覚が非常に崩れています。これは専らマスコミ報道のせいだと私は思っています。問題の重要性、重い・軽いはいろいろありますが、そのバランスが著しく狂っていると思えます。

これから大水害の時代に入ってくると言われます。もちろん地震も大変な問題です。水害はこれまで人間がある程度管理していましたが、これからは気候変動がどんどん進んでいきますので、水害にも同時に備えていく必要があります。今回の論点の一つ

にも災害リスク・水害リスクがありますが、その対応が必要です。

ここ数年振り返ってみますと、今年の台風 15 号・19 号を含めて日本のどこかで水害が毎年のように起こっています。これはあきらかに気候変動の影響です。気候変動が進むと雨が降るときはむちゃくちゃ降るようになり、降らないときは全く降らないというように、気象現象が極端になっていきます。水害リスクが今まで以上に高くなっていくのがこれからの時代です。今まで大丈夫だったから今回も大丈夫というのは通用しません。

水害に対しては、きちんと対応することが必要で、この 7 月に国土交通省から答申が出てきました。キーワードは二つです。気候変動が進んでくるので、「流域治水」で対応しましょう、という提言です。今までは河川管理者に任せておけば大丈夫だと思っていたのですが、気候変動が進むと河川管理者だけでは対応しきれないということが明らかになり、そのため周辺の市街地、農地、地域社会が総力を上げて頑張っていかなければいけない。そういう時代に入ったということです。

水害は、川の容量を超えた雨が降れば、どこかで水が溢れる。溢れた水は高いところから低いところにしか流れない。これは当たり前のことですね。この当たり前の現象に対して、私達はどのように対応していかなければいけないのか、そういうことを考える。防ぎきれない一定のリスクを許容する上で、どんな暮らし方を考えていくのか。どうこのまちで幸せに暮らしていくのか、ということを考える必要がある。そういう時代に入ってきたということです。

昔の時代を見ると水害は当たり前で、水害があることを前提にいろいろな暮らし方が行なわれていて、各地でいろいろな工夫がなされてきました。今は水害と共生する時代に入っています。ここで重要なのは、水害リスクがあるから「次は危ない」、「こんなところに居てはいけない」と一瞬、思いますが地震と違って水害は、浸水災害状況図を見て予測できます。十分に予測して事前に避難し、運悪く浸水したら、水が引くのを待って片付け・復旧するという順序になっています。この時に自助、共助、公助、それぞれどのような役割があるだろうと今一度冷静に考えていただきたいと思えます。

庁舎移転では、全国で防災が重要なキーワードになっていて、侃々諤々（かんかんがくがく）の議論が二宮町だけでなく、いろいろなまちでされています。

いろいろな結論の仕方がありますが、葛飾区の浸水対応型市街地構想は昨年 6 月に作られました。葛飾区は水害が起こるリスクが高い地域で、海拔ゼロメートル地帯、全域が川面より低いところにあり、一旦、川が溢れば、2 階位まで全部浸水します。そういうまちに対して、そこに住むなということではなく、浸水しても大丈夫な市街地を造っていこうと計画的に開発して、周辺の地域に安全のおすそ分けができるような拠点空間を作り出すことを考え始めました。水害にあっても大丈夫な状態を作ろうとしています。

かつての葛飾区役所は浸水しても大丈夫なように昭和 37 年に計画されていました。ところが、その 15 年後に造られた区役所の 1 階の入口は半地下でした。15 年間で区

民・役所の意識が変わって、水害が起きたら使えない建物を造ってしまった。これを逆向きにしていくことが重要なことだと思います。

一番大切なことは「防災のまちづくり」であって、防災のことはもちろん考えます。他の課題ももちろん考えます。そういう発想で考えていくことが非常に重要です。

井上 岳一先生

株式会社日本総合研究所 創発戦略センター シニアスペシャリスト

私は二宮町に住んで8年目となります。もともとは林野庁に勤めて、田舎の問題を研究し、人口減少の中での持続可能性をどのように実現するか、それにデジタル技術をうまく使えないか、ということの研究をしています。

庁舎問題を考える前に前提となる議論をしておきたいと思います。

日本の人口を考えてみますと、2100年にはほぼ江戸時代末期とあまり変わらない人口まで減少します。明治維新の頃の3,300万人の人口が、現在の約1億3千万人と4倍になり、これから100年かけてそれが三分の一に減少するというのが、今後の有り様です。

これは国土交通省による「国土のグランドデザイン 2050」ですが、地図中の青色の区域は人口が半減していくところです。2050年までに国土の6割が人口半減以下になり、そのうちの2割は人が住まない地域になります。日本列島はスカスカになっていきます。昔は地方に人が住んでいたが、都市に人口が集中し、地方に住まなくなっていくのがこれからの現実です。

先ほどの加藤先生の話のように、昔は人口が多く行政が縦割りでやっていけたものが、これからも縦割りでやっていくと人口が少なくなってスカスカになり、縦割りでやっていけなくなります。

もう一つ通勤について、これまで例えば二宮から東京・横浜まで行くという、通勤の太い流れがありましたが、これからは通勤者が減り、そもそも人口が減ると大きなニーズがなくなっていき個別のニーズになっていきます。

20世紀は一つの大きな矢印の時代でしたが、21世紀は小さな矢印の群れの時代になっていきます。一つの方向で何かをやるというのがとても難しい時代になります。

このような中で菅政権になって、デジタル田園都市国家と言っています。平井デジタル担当大臣は香川県出身です。同じ出身の大平総理大臣がかつて、東京一極集中問題の中で、国土を分散的に使っていこうという田園都市国家を提唱しました。デジタル担当大臣もこの意思を継いでいます。

新型コロナウイルスでも集中することがリスクとなり、郊外や地方を上手く使っていこうと、デジタルでテレワークすれば、どこに住んでいてもよいのです。私も毎日東京へ通勤していましたが、今は週二日通勤すれば良い方です。

暮らしや幸福度の概念について、今まで利便性だけで都市に集まってやってきまし

たが、それよりももっと緑溢れる豊かな環境の中で暮らしていこうというようになってきました。

その時に遠距離の問題を解決するのがデジタルです。遠隔医療や遠隔教育などに加えて、行政のデジタル化が今言われています。

国は2030年までに行政のデジタル化を実現することを目標としており、デジタル化によりスマホとマイナンバーカードで多くの手続きができるようになります。このため役所に出向く必要はほとんどなくなります。

庁舎を否定しているような話ですが、デジタル化によりコンビニでも手続きできる、そのかわりにその分、本当に必要な相談などに手厚く役所の職員を割けるような時代になっていきます。

担当大臣によると、国はデジタル庁に非常に強力な権限を持たせて、今バラバラな全自治体のシステムを2025年までに統合します。国が用意して地方自治体にデジタル化を進めるようにします。スマホを使えない高齢者はどうなるのかという議論がありますが、これはデバイスの問題であって、手入力しないで音声で入力するなど、デバイスが進化すれば高齢者も使いやすくなります。

デジタル化により可能となるものとして、公共サービスが24時間365日どこでも使えるようになります。他にも一人ひとりの細かな多様なニーズに対応できるようになります。また、遠隔診療や医療など、そこに行かなくても、どこに居てもいつでも受診が可能となります。

具体的な例として、網走市では路線バスを廃止しオンデマンドのバス（「どこバス」）にしました。決まった路線に関係なく、使いたい人が（新たに多数設置された）乗降ポイント・人数をスマホのアプリに入力することで、10人乗りのマイクロバスをAIが瞬時にマッチングして利用できます。これにより経費も安くなり、使い勝手がよく住民満足度も高まりました。これが一つのデジタル化の効用です。

オンデマンドバスは、路線バスとタクシーの中間です。路線バス・タクシーそれぞれ法律があり縦割りで扱っていたものを、その中間、横串のようなサービスをすることによってこれまで満たされていなかったニーズを安いコストで実現できました。

これから大切なのは行政や企業の目線ではなくて、利用者のニーズ目線でいろいろなものを采配していくことが必要な時代になっていきます。

さて、庁舎建替えのことですが、縦割りになっているものを統合する、保健センターを統合できないか、行政の資源をゼロから考え直して建て直すのであればこれまでの縦割りをどういうふうに横串を刺すか、皆にとって何が重要であるかなどを改めて考えることが必要です。

これまでワークショップで出されている皆さんの意見から、公共施設としての庁舎、公共サービスを提供する場、町民の誇り・シンボル・公共空間としての庁舎、公共圏・デモクラシー（対話・理解）という4つの機能が、庁舎に求められていると思います。

ワークショップで強調されていることとしては、窓口のあり方（これはデジタル化でかなり代替できますが、デジタルを使えない人、あるいは相談をどうしていくか）、

そして非常時の災害対策本部の機能、また町民の誇り・シンボルの場、子どもが遊べたり勉強できたりする場・町民の交流の場ということ、これらに皆さんの関心が高いということが分りました。

庁舎建替えに際して、二宮町の未来は、これから40年かけて昭和40年の人口に戻っていきます。急速に人口が減っていきます。問題なのは20年後には高齢者の人口が生産年齢人口を上回ります。働く人がどんどん減ってきます。これにより税収が減り、高齢者のケアの費用が増えていきます。このままだと破綻します。と、いうようなことは認識しましょう。

もう一つ、デジタル化の議論が進んでいくとどうなるのか。自民党は昔から道州制ということを行っています。これは自治体のシステムを全部統合していくということです。神奈川県などの都道府県が要らなくなり、市町村などの基礎自治体があれば良い、となってきます。基礎自治体も、二宮町としてある必要はなくなり平塚市のシステムに統合していけばいいのではないかという話になってきます。そのため、デジタル化を進めることは、必然的に自治体の再編議論を呼んでいきます。

馬しかなかった明治時代ぐらいのことで、通信も無かった時代ですから、そういう距離感覚で考えた自治体の区割り、デジタルがあることを前提にした区割りを考え直すということになりますし、サービスの提供の仕方も非常に変わってくると思います。

そのため、数十年するうちに庁舎が不要になってくる可能性が高い。それは庁舎を造るなどいっているわけではありません。多用途に転用しやすい庁舎にしておかないとまずかろうと思います。

その時に大切にすべきことは何かというと、二宮町が総合戦略を作るときに実施したアンケートで、転出した人の決め手になった転出理由と、転入してきた人の決め手になった転入理由のことです。

このアンケートは公開されていますが、転入してきた人の理由では、地域コミュニティやよく言われる自然環境のことなどは全然指摘されていません。それはむしろ転出する決め手として、公園や自然環境が無いと思われていて、買い物の利便性、町並み、町の雰囲気転出していく決め手となっています。

転入してくる人は決め手として、治安の良さがあり、女性は二宮町の雰囲気が好きで入ってきている人は一部いるようです。

これから田園都市国家というものになってきて、都心に集中していた人達が地方に分散するようになると、そのうちの若い人達に二宮に住んでもらって、生産年齢人口の減少を少しでも補填したいわけです。

そのように生産年齢人口を増やすには、魅力的な町並みがあるとか、豊かな公園や公共空間があるとか、二宮を代表するお店「ブルーランジェリーヤマシタ」のような、チェーン店ではない魅力的な個人店がいっぱいあるとか、ある程度の民度や文化の高さとかがある町というのが多分、これから若い人達に好まれていくのかと思います。

大事なことは町に誇りを持つことで、誇りは何から生まれてくるかということ、未来に向けたビジョンを町が持っていること。その中で「まちづくり」に参加している

実感が持てること、ある種の仲間や同士のいること、上手くいっている地域や、誇りを持っている地域・町の人達と話していると、このようなことが、すごく重要になっています。

例えば、神奈川県唯一の過疎町村である真鶴町は、今年初めて社会増に転じました。人口全体は減っていますが、若い人が多く転入してきています。30年前に作られた「美の条例」(まちづくり条例・美の基準)という、マンション建設に反対して作られた町並みを綺麗に維持しましょうという独自の条例が今、ようやく若い人達に評価され転入へと繋がっています。

あるいは、徳島県の上勝町は20年前に「ゼロ・ウェイスト」というゴミゼロ運動・ゴミゼロ宣言をしました。20年経って今、これに惹かれていろいろな企業が入ってきています。

では二宮町は「ゼロ・ウェイスト宣言」をすればいいのか、「美の条例」を作ればいいのかと。そういうことではなくて、デジタル時代に二宮町に資源がなくてもできること、ある種のデジタル・デモクラシーというか、デジタル技術を活かした真に民主的な町を目指すべきではないでしょうか。今回50人のワークショップに関わった人達がいらっしゃいますが、いろいろな人達、町民全員が意見を言えるような環境の中でいろいろな政策が決まっていく、それはデジタル技術を駆使すればできるようになっていきます。

町並み以外をみんなで作り育てていくようなある種のデジタル・デモクラシーの最先端の町みたいなことになっていけば、デジタル時代に対応した若い人達にとっての魅力的な町になっていくだろうと思います。

実際に台湾はそのようなことをして、ここ7年くらいですが、すごく魅力的な国になっています。6～7年で変えられるのですね。そういうことを考えています。

山崎 俊裕先生

東海大学工学部建築学科教授

10月3日にワークショップで講演をいたしました。私は二宮町の町民でもあります。建築の立場と住民という立場の二つの側面から、今日はお話ししたいと思います。

今日は最初にそれぞれ3つのグループごとのまとめとしてお話しいただきました。このワークショップを通じて、感じたことを最初にお話ししたいと思います。

町と専門的なコンサルが庁舎の基本構想・基本計画(案)を策定したわけですが、その中の基本計画(案)は、一旦リセットされ、先ほど発表の中でもありましたが、自分達をもっと早い段階で意見を言ったり、アイデアを出したりできる機会があったら良かったなあというお話があったと思います。

私も全くそのとおりだと思います。現在、新しい基本計画をどのようにこれから進めていくか、というような大事な時期かと思っています。町民の立場でこれからの方向性

をどう考えていくか、非常に大事な視点ですが、一方で建築的な話、コスト的な話をどのように進めていくかが、喫緊の課題だと思います。

今日は時間が限られていますが、前回のワークショップでまとめられたもの、講演でお話したことを振り返りながら、新しい方向性をどのように考えれば良いのかについてお話ししたいと思います。

最初に振り返りになりますが、これは前回お話ししたことと同じような内容です。

それぞれの先生方からお話がありましたが、人口が減少する中で、庁舎をどのように考えるかということが改めてあると思います。庁舎というのは公共性のシンボルであり、ギリシャ・ローマ時代からずっと長く続く公共性の象徴的な建物である、ということも改めて認識をしないといけないと思います。

そして基本計画で一番考えなくてはいけないことは庁舎の規模、機能、ゾーニングです。既存のラディアンそして周辺の建物やオープンスペースを含めて、庁舎機能をどう関係付けていくのかというのが具体的なテーマになります。基本計画で検討すべきハードな側面の規模・機能をどのように考えるかということだと思います。

私自身、二宮町で公共施設再編・再配置検討の委員会、あるいは小中一貫校の検討委員会をお手伝いした経緯があります。

二宮町に限らず、全国で人口減少に伴って公共施設を縮小・減築をすることが大きな課題となっています。人口が増える時代と違いまして、公共建築物、ストックを減らすというのは非常に難しい。足し算よりも引き算のほうが難しいというわけではないですが、引く場合は、住宅地だと穴あき状態になってしまったり、都市美がちょっと失われたりすることがあると思います。

公共施設の再編を考える時に施設機能や面積を減らすことにより、いろいろな行政サービス機能が低下するのではないかと皆さん心配されます。その対応の方向性としては複合化を図っていくことが挙げられます。

二宮町には多くの公共施設がありますが、類似の機能が複数あって、これとこれをもっとうまく連携させることができるのではないかと、というようなアイデアが皆さんの中にもあると思います。複合化を図る時には、機能間の相互作用・相乗作用をどのように考えていくかということが重要です。

高度成長期の時代には単一機能（ビルディング・タイプ別と言っていますが）をたくさん作ってきた歴史があります。一方、減築する時代にはサービス機能を低下させずに如何にストックを減らしていくか、すなわち相乗作用（ $1 + 1 = 2$ の効果）をどのように活かすかということになるかだと思います。

ワークショップやシンポジウムもそうですが、町民参加型の計画・設計プロセスでは、多様な価値観、要求、要望を可能な限り考慮して取り込んでいくということが大切です。

一方、基本計画では、そのような多様性にどのくらい対応し、総合的にコントロールできるかが大事になってくると思います。あれが欲しい、これが欲しいということで機能をどんどん足していって、これぐらいの機能が必要だが、本来造るべき面積の

2倍、3倍になってしまうというようなこともあるでしょう。例えば、皆さんが住宅作りをする時にも同様で、コストと限られた床面積や敷地の中でどのようにまとめるか、ということにも対応すると思います。

先ほど井上先生のお話にもありました様に、人口が減少したときに庁舎が要らなくなるかもしれません。私もワークショップの中で問題提起をしましたが、そうしたときに規模を縮小するとか、用途転用も想定しておかなくてはいけないだろうと思います。

群馬県神流町(かんなまち)の中里合同庁舎の事例をワークショップの講演の中で紹介しました。この町では役場庁舎を建替えようと設計していた段階で、町村合併が生じて新しい庁舎としては不要になってしまいました。そこで、スケルトン(構造体・階段、設備部分・水周り)だけを造って、内部は他の用途に転用可能なように設計を変更したという事例です。

もう一つ、ドミノシステムの紹介もしました。ドミノシステムというのは、非常に単純な建築のストラクチャー(構造)です。これは床と柱と階段のみの構造で、「少ないことは良いことである(Less is More)」と有名な建築家のミース・ファン・デル・ローエの言葉も引用しましたが、どういうものを最低限造らなければならないかということでした。

次にスケルトン・インフィルという集合住宅などで考えられている概念です。

内部の多様な住要求に対して、従来型の間取りや機能設計をすることでは、もはや建築が対応できません。建築は長寿命化を図る視点では60年、80年あるいは100年使い続けなければならないので、中身の変化に対応できるようにスケルトン・インフィルで単純な構造体だけで造っておいて、中身は多様に変えられるようにするという考え方が必要です。

建築家のコルビジェが提案したドミノシステムで考えると、例えば上階のほうにガラスだけ張って、下階は浸水があっても影響のない機能にしておく。すなわち、内部がフレキシブルで、多様に使える方法、単純化していく方法があるかと思います。ただこれだけだとトイレがありませんので、やっぱりトイレは要りますよね? 本当に必要なもの、優先順位の高いものから機能を考えていくということが重要かと思います。

もう一つ「議場が本当に必要か?」という問題提起をしました。議場のあり方に関して今回のワークショップでも、町民の方からご意見をいただいておりますが、非常に良いことだと思います。

議会はギリシャ・ローマの頃からあるわけですが、公共のシンボルとしてのアゴラ、広場で町民自治を行なう議場機能がありました。外部の空間でいろいろ議論する場所があった訳です。

議場そのものがどのような形であるべきか? 議場を専用化しないで多目的に開かれた議場にしようと英断している先進的な自治体もあります。議場がもし必要だと

した場合にどこに造るべきか、「アオーレ長岡」(新潟県長岡市)を紹介しましたが、1階に議場があって、土間の広場(「ナカドマ」)に対して開かれており、「開かれた議場のモデル」になっていると思います。議場自身が開かれるということは、非常に大事な概念ではないかと感じています。

ワークショップの各班から出されていたカードがこのようにあります。これはどうでしょうかと、もう少し突っ込んで聞いてみたいこともありますし、皆さんの大変すばらしいアイデアもここに挙がっています。

庁舎をラディアン周辺に造る考え方がありますが、一方で二宮小学校を転用して庁舎を造ったらどうかとか、ホテルを用地買収したのならそこで新しく造ったらどうか、そのようなアイデアも出ています。

一方、これらのことは建築の技術的な意味でのスケール、基本計画ではボリュームスケールを考えなければいけないと思います。

白紙となった(旧)基本計画(案)の中では、庁舎の延床面積が4,000㎡プラスアルファと出されております。ここ(画面)で書いてあるボリュームは私の独断で作っておりますが、スケールとして、ラディアンの前の第1駐車場で2,000㎡(タテ・ヨコ40×50m)ぐらいの四角で書くとこれ(画面)ぐらいの大きさになります。このグリッド(方眼)はだいたい10×10m、マス一つが100㎡ぐらいの大きさになります。1階あたり2,000㎡ですので、全て使うと総2階建てとなり、およそこのぐらいになるということです。

ここの敷地に確定しているわけでは有りませんが、(旧)基本計画(案)では、リアリティや機能の必要性を検討する上で、実際にボリュームスタディを計画段階で行なっています。この場合2階建てになるわけですが、例えば1階の部分は津波あるいはその他の浸水を考慮して、ピロティまたは建物を上にあげたほうがいいのではないかと、または1階の部分は浸水した時にもう1回再生できるように少しオープンな空間に造ったらいいのではないかと、などいろいろなイメージが出てくると思います。そのようなスタディはこれからだと思います。

次の例ですが、これはタテ・ヨコ30×40mぐらいの大きさで面積は1,200㎡ぐらいで、この上の部分が3層で3,600㎡ぐらいです。

議場が本当に必要かどうかという話を先ほどしましたが、ちょっと暴言になるかもしれませんが、専用の議場を別に造るのか、あるいはこのような多目的ホールのあるラディアンを議場として使う可能性はないのか? もちろんその場合は改修等が一部必要となると思います。私はラディアンを使えとっているわけではないですが、ストックを減らしていく時代で、しかも複合化を図って相互に連携をする時にそのような考えがあってもよいのではないかと思います。

この図の下のほうに400㎡ほど延びていますが、ラディアンと仮に配置した庁舎を連携し物理的に繋ぐため、2階で庁舎とラディアンを繋ぎ、その2階には庁舎以外の町民活動スペースや議会の事務室、委員会などを配置する考えもあるかもしれません。ラディアンと庁舎の関係を物理的にも連携する前提で考えると、一つには建築的にこ

のような配置が考えられます。

ワークショップの提案の中では、果樹公園の中に庁舎を配置したらどうか、という意見もありましたし、他の配置方法ももちろんあると思います。

実際の構想の提案に対して、具体的にその可能性を検討していくことが基本計画では重要であり、特にスケールを入れた検討をすることが大事ではないかと考え、今回このような形で、スケールのイメージを示させていただきました。

4. パネルディスカッション

(加藤先生) パネルディスカッションに入ります。

1. 災害リスクをどう見るのか、2. DX (デジタルトランスフォーメーション) を前に如何に未来を先取りするのか、その仕方はどういうものであるべきなのか、3. 地域の持続性を如何に高めていくかの、三つのテーマで話していきたいと思います。

早速、1. 災害リスクをどう見るのかについてです。地震災害は突然来るので、耐震性は必須です。水害に関しては準備期間が相当ある上、予測が出来ます。なので、浸水が始まる前までにきちんと準備が終えてなければ、災害対応としては失敗になります。浸水前までにきちんと機能するということが、加えて浸水している間は特にやれることはないのです、水が引いた後にきちんと機能することが重要です。この条件を満たせば、災害リスクに対応出来る庁舎になりえると、専門家の目から見て感じています。ここでは山崎先生に質問ですが、仮に浸水域に庁舎を建てる場合、1階が浸水して水が引いた後、すぐに機能するような庁舎の建て方というのは、建築的には可能なのでしょうか。

(山崎先生) 機能不全にならないというような意味合いでよろしいでしょうか。

(加藤先生) そうです。

(山崎先生) 建築物の構造的な耐力があって、非構造部材がいろいろな形で被害を受けたとしても、スケルトンの部分がしっかりしていれば、いろいろな形で基本的には使えるように造るのが公共建築のベーシックな考え方です。

ただ、1階に何を配置するかということが大事で、多様な機能に対応するよう出来るだけオープンな形で造って、災害があった時の復旧だけではなくて、将来的な機能変化に対応して変えられるといったことを基本として造られていけば、実現可能なものが出来ると思います。

(加藤先生) 浸水や地震災害にしても、特に浸水に対しては予め浸水することを条

件としてきちんと建物をデザインすれば、浸水しても機能不全に陥らないような建物は十分に可能であるという理解でよろしいでしょうかね。

では、五十嵐さんに質問です。特に東日本大震災後、災害リスクに対してとにかく安全でなくてはいけないという思想（安全至上主義）が蔓延しすぎているように感じていて、正しく災害リスクを理解するということが、非常に難しい状況になっている気がします。そういう観点から見て、ワークショップでの災害リスクの取り扱いは、専門家としてどのような印象でしたか。

（五十嵐） ワークショップでは、これまでの漠然とした情報から事前に詳しい説明をして頂いて、少し理解が進んだ気はしています。ただ、浸水リスクに対してどのように考えるかの印象は、やはりリスクゼロが良いという意見もありましたし、対策をすれば良いのではないかという意見も勿論ありました。

（加藤先生） 専門家からすると、災害リスクを知らない事で漠然とした不安感があって安全を求めていく、そういうサイクルに入りがちに見えます。なので、行政や私達専門家を含めて、この程度のリスクはありますよということをきちんと説明出来る、分かりやすい資料と情報の提供というのは必須と感じています。その意味では、今回のワークショップでリスクについての情報というのは、少なくとも参加者に対してはきちんとした情報提供がなされたという理解でよろしいでしょうかね。

（五十嵐） そのように思っております。

（加藤先生） 町民パネリストの方にお伺いします。現庁舎は非常に古く、耐震性もありません。その中で新しい庁舎を考える時に、災害リスクという観点から安心感は増しているのか、下がっているのか、どう捉えているのか率直な感想をお願いします。

（町民パネリスト） 今、現存で分かっているのが耐震性能を向上させることと、川の氾濫に耐えうる構造とすることです。その他にも災害はありますが、その全てに対応することは出来ないと思います。今分かっていることを解決して災害に強いものを造る、明確に明示されている情報を押さえ、対策を打てれば良いと思います。

（町民パネリスト） 耐震性というのは、本当に考えなくてはいけないと理解します。ワークショップ内では、例えば浸水後にどのくらいの時間でどう対応するかという質問が出て、そこはまだ明示されていません。これから町がつくって下さると思いますが、どうなるのかが疑問です。それから庁舎の浸水リスクは建物や技術でカバーが出来るとのことですが、そもそも葛川が溢れたら周辺の民家にも被害はあります。やはりその辺りも含めて、町としては単なる庁舎が大丈夫だったら良いという世界ではないと思うので、県に水害対策を要望している中で、その辺もこれからの議論等で考

えていくべきことだと思っています。

(加藤先生) まさにそれが「流域治水」と新しい名前と呼ばれているところです。都市としての機能も水害が起こるということを前提にしつつ、如何に被害を小さくしていけるのかだと思います。それは役場だけではなくて、地域社会の取り組み、或いは農地で水を溜める等も含めてこれから考えていく、非常に重要なテーマのような気がします。

(井上先生) 震災と葛川の話ばかりになっていますが、葛川は大きな川では無いので、ものすごく人が死ぬような大災害にはならないと思います。その辺り、災害の専門家の加藤先生はどのように考えられているのでしょうか。それと災害といった時に、これから噴火で火山灰が落ちてきたり、或いは今回のパンデミックみたいに伝染病が流行って多くの人が死ぬ等、町民パネリストの方も支援を受けられるような広い場所がなければならないと言っていました。直接的な災害で庁舎や町が壊れるというよりも、人が亡くなったり、火山灰でいろいろなことが機能しなくなる等、そちらの方が大きい問題の様な気がします。なので、そういうことをどう考えていくかという点が必要なのではないかなと思います。

(加藤先生) そういう意味では、想定しきれないものも含めて対応出来る柔軟な態勢というのが必要です。空間的に言うと、広いオープンスペースがそこそこあるということと、情報収集や提供を含めて、様々な意思決定をするために必要な空間というのは多分必須だと思います。パラパラ小粒なものがあるよりかは、拠点的な空間があった方が災害対応、想定外の状況を含めて対応しやすくなるというのが間違いないというふうに理解しています。

災害リスクだけでもいろいろな議論が出来ると思いますが、少なくともきちんとした知識と情報を持っているワークショップに参加された方へのお願いがあります。

漠然とした不安から、災害リスクに対して敏感になりすぎる状況もあるので、出来れば身近な人にきちんと周知して頂けると良いかなと思います。

次に二つ目のテーマである未来志向の庁舎、未来をつくっていくんだということに関してお話しします。井上先生から DX (デジタルトランスフォーメーション) のお話もありましたが、日本は世界の中でも遅れていて、それに追いつこうとしているところだと思います。井上先生、先程の講演の中にもありましたが、相当変わらなければいけないのでしょうか。

(井上先生) デジタルという時に何通りかの方向性があると思うのですが、一つは紙に頼らずにいろいろなものがオンラインで出来るようになることです。且つ、二つ目が AI 等を使って、自動的にいろいろなものが処理出来るようになることです。三つ目がその自動といった時に、単純にコンピューターの中だけで完結していくのでは

なくて、例えば自動運転みたいな形で、人が運転していたものを全部車が自律的に動くようになるみたいなことです。

今、政府は自動運転的なものやロボット等を一緒に進めようとしています、やはり当たり前前にそういうものが普及するには2030年代頃まで時間が掛かりそうです。

ただ、オンラインに関しては、いろいろなことが処理出来るようになって、行政の方々が人手で時間を掛けてやっているところを自動化していくのは、今の技術で出来る所です。こういった話が出てきた時に、職員の仕事がなくなるじゃないかという話が出てきますが、昭和の縦割りの的に考えてしまっただけでは出来ません。リーダーシップを持てる方が断行していかない限り、進まないというのが現状です。

ただ、今回のコロナをきっかけに国全体が進めていこうとなっているので、今まで進まなかったことがこの5年くらいで急速に進む形にはなってくれるのではないかと思います。二宮町が何かを先行するのは簡単ではありませんが、今、国が向いていない方向で、最先端を行けるのではないかと考えています。

(加藤先生) 今後のデジタル化というのは、今まで人間がしていた、ある種の非効率的な作業をデジタルが肩代わりしてくれる。つまり、つまらない仕事から人間を解放してくれると思えば良いのです。開放されて出来上がった時間は、もっと創造的で人間にしか出来ない作業に投入することが出来る。そうすると、役所の仕事の仕方は大きく変わり、より高度な仕事になっていくと思われま。そこではおそらくオンラインでは無く、人間対人間の対面、ワークショップの中でも相談事業は拡充すべきだという声もありましたが、相談事業も新しい政策立案も、そういったものをもっと人間ならではの素敵なことが出来るような、そういう庁舎を造っていく良い機会だということでしょうか。

(井上先生) 逆に言うと、そういうところで素晴らしいことが出来ないと、二宮町の役場はいらなくなります。全部、平塚市と統合すれば良い訳なので、本当の意味で役場の方々もこれから真価が問われるというか、そういう時代になっていくと思います。

(加藤先生) 町長、そういうことらしいので是非、心して進めて頂ければと思います。今の話題に対して、町民パネリストの方、何かコメントはありますか。

(町民パネリスト) デジタル化は、世の中のキーワードになっていて、基本的にはどんどん進めていくというのは間違いないと思いますが、恐らくそれでもなかなか進まないのだろうなと思います。まず上からデジタル化を進めなさいと言われても、その作業をする時間を作ってくれない、それを頑張った人に頑張っただけの報酬が与えられないというのが結構あると思うんですね。

役場の方のお話を聞いていますと、何かあると現場の人が大変な思いをしてやって、

ものすごい残業をしてしまう等というのがありました。やはり本気で取り組むということであれば、人をきちんと配置して、やる気のある人を、きちんと大切にしていって取り組んでもらいたいと思います。是非、どんどん進んでもらいたいと思います。

(加藤先生) ありがとうございます。そういう状況だと、どんどん世界から後れをとっていく感じになりますよね。

今は電車の自動改札システムが当たり前にあります。実は東京が自動改札になったのはすごく遅い時期でした。私が中学生時代には、名古屋の地下鉄で自動改札は当たり前でしたが、大学に合格し東京に来たら、大勢の乗客が手で切符を通しているのを見てすごく愕然とした記憶があります。ある程度システム化されてしまった大きなものをガラッと替えるのは大変なので、なかなか替わらない仕組みになっています。

先程の社会の慣性の法則がこの分野でも当てはまっているので、是非どこかで不連続なチェンジをしていかないと、地域の持続性の維持にも繋がって行かないのかなという気がします。

一方で、未来志向といった時に、役所の仕事の仕方や DX の話だけでは無く、空間としても新しい姿というものを目指していく必要があると思います。

山崎先生の話の中にも空間的な新しい姿というのがありました。キーワードを二つ程上げるとすると、どんなキーワードで新しい空間をイメージすれば良いのでしょうか。

(山崎先生) 庁舎に限らず、新しさというのはいろいろな機能の複合、或いは相乗作用、それらの化学変化的なもので新しい場が生まれてくるということがあると思います。機能の複合に関しては、割と定番の組み合わせみたいなものが公共施設に提案されていますが、恐らく二宮ならではの新しい複合による化学変化的な建築の空間と活動というものでしょうか。

私は器だけではなく、中の使われ方やアクティビティみたいなものが建築をより豊かにすると思っています。一つはそのような複合化による機能、或いは使われ方の新しいパラダイムみたいなことがあるかと思っています。

定番メニューで考えることも必要なのですが、全く違う機能がそこに集まることによって新しいことが起こる、それが二宮らしさに繋がると良いかなというふうに思っています。

二つ目は建築のキーワードにならないかもしれませんが、C班の方から PFI の話がありました。PFI というのはハードとソフト、つまり建築から管理運営まで含め、長期スパンで民間活力を生かしてトータルで様々なことを考えて一括で委託する手法のことです。

この方法はお金がない公共施設の整備等で行われていて、国の方でも PFI の事業で庁舎が整備されています。一方、規模の小さな自治体では、PFI をやりたいとしても出来るかどうか、準備期間も含めてかなり時間が掛かります。

先日、寒川町で第6回の公共施設再編の委員会がありました。その中で、新しい複合やいろいろな使い方というようなものは、ハードとソフトだけを用意すれば良いという訳では無く、時間軸でそれを運営していくための新しいマネジメントシステムを考えないと、上手くいかないだろうという意見が出ました。

お金が無いから、リース方式で暫定的にいろいろな形で16年かけて造るという話も出ていたのですが、新しい施設と運営を提案していくために暫定的に必要な手当はしていくけれども、ハードとソフトを合わせたトータルな提案にしていかななくてはならないと思います。

二つ目のキーワードをまとめると、トータルなマネジメントをハードとソフト両面について考えていくということかなと思います。

(加藤先生) ありがとうございます。一つ目は相乗効果というか、 $1+1=2$ よりも大きくなる、むしろそれをどれだけ大きく出来るかというのが、今後の計画、設計の重要なポイントであるということですね。二つ目は、今まで昭和の時代は町役場庁舎の空間を造れば中身は自動的に決まっていたけど、これからはDXの影響もあり、町役場庁舎の空間があったとしても、中身の活動はこれから一緒に育てていかなくてはいけないということですね。おそらくこの部分は、役場が考えるだけではなくて、民間や町民の人達と協働しながら未来的な新しい活動のあり方というのを考えていき、そこでやはりマネジメントというのが極めて重要なキーワードだと、そういうお話だったかなという気がします。

今の先生のお話を聞いて、五十嵐さんは町民ワークショップを代表する立場として如何ですか。

(五十嵐) ワークショップでは、空き店舗等を使い分散して配置するという意見や、将来的に人口が減ってきたときに使わなくなる部分も出てくるという事を想定して、新しい建物はいろいろな転用が出来るようにというような意見が出ていました。

もう一つは、皆さん維持管理を今後きちんとしていけるのかという事をすごく心配していて、孫や子供の世代に負の遺産にならないように、庁舎だけではなく他の公共施設を含めてしっかり維持管理が出来るようなことを考えて欲しいという意見が強く出ていました。

(加藤先生) 基本的には、専門家と町民のものの見方というのはさほど大きくはずれていなくて、一緒に考えていこうというような気運が感じられたかなということかと思えます。

最後のテーマに入ります。地域の持続性を高めるために二宮町に何が必要かということで、これは多少、役場庁舎の話を超えた内容で結構ですので、町民の方にお話頂ければと思います。そして古くから住まわれている方は昭和40年の二宮町を頭に思い浮かべながら、あそこまで縮小してはならないと直感的に理解されているかと思

ますが、場合によっては消滅してしまう可能性も無きにしも非ずというような人口規模だと思えます。そういう意味では地域の持続性、今の非常に豊かな幸せな暮らしが出来る二宮町を次の世代に繋げていく為に今何をすべきなのか、ということを発言して頂ければと思います。

(町民パネリスト) 今回ワークショップのお話があつていろいろと考えることがあつたのですが、この町に子どもも含めて住み続けたいと思えるか、子どもが将来戻ってきたいと思う町かなと考えています。その中で少し思っているのが、愛着をすごく持てる場所の重要性です。

私が以前住んでいたところには、木場公園という大きな公園がありました。そこには大きな広場や子どもたちが水場で遊べるようなところや遊具等もあつて、隣には現代美術館がある環境でした。規模が違うのでそれをそのままというのは無理ですが、そういった場所があると、とりあえず公園に行こうか、何もないけど行ってみるかとなります。やはり、あの町に住みたいなと思いついたとき、木場公園の思い出が多くあります。

それから、そういった場所があると若い人達も集まってくるし、現代美術館がある関係で良いお店がいっぱい出来てきて、良い循環が回ってくると思つています。静かに過ごしたい子や騒ぎたい子、楽器を練習したい中高生もいて、皆の思い出になるような場所が一つあると町が発展していくと言いますか、持続していくベースになるのではないかと思つています。

(加藤先生) 持続性を高めるために愛着が重要ということですね。愛着というのは、子どもも大人も次の世代も含めて、皆で共有出来る思い出の場みたいなものがあると愛着が増えていって、結果地域の持続性が高まっていくということで、素晴らしいキーワードだつたと思つています。

(町民パネリスト) 私の地元は福岡県の田舎の方で、特に何があるという訳ではありませんでしたが、大きな公園や池で釣りをしたり等、楽しく過ごしていました。今の発表を聞いて、やはり愛着というのが大事だと思つました。

これから二宮にどういふことを求めていくかというところで、やはり持続性の効果を発揮する時期というのが、子ども達にどういふものを残していくべきなのかというところだと思つています。庁舎は執務や手続きをするためだけの建物ではなくて、もう少し魅力のある楽しい建物であれば、そういった対象ではない子ども達が入り出し、そのまま公園へ駆け込むというような空間になって、そこから何か化学変化が起きて、大きな町のイベントに繋がるようなきっかけになるのではないかと思つています。

(加藤先生) 新しく住まわれた方は二宮町が故郷ではないけれど、そのお子さんはここが故郷になるということですね。

(町民パネリスト) 私自身は、例えば公園を使って皆でフェスやイベントを組み立てて集まったり、ここもお金を出さないと使えないというのではなくて、もっと町民の方がいろいろなイベントをするために使えるようになったら良いと思います。花の丘公園も電源があるので音源が使える、ステージ的なスペースもあります。もっとそれを開放して自由に使って、何かやっていいみたいな場所があるので、イベントや催しを自分たちが作って、体験して、それを残していくというか、共有するというか、何か物じゃなくて取り組みや経験は、特に子どもには大事ななという気がします。

(加藤先生) 共通するのはやはり思い出づくりの場ですね。いかにそこに町民の主體的な参加があるので、そういう活動が出来る場があって、そういう活動が作り上げられて持続していけば、その結果、地域の持続性も何とか維持出来るに違いないということですね。

せっかく庁舎にお金を掛けるとすれば、きちんと地域の持続性に繋がるような工夫を出来る限りたくさん含めていくということが重要だろうなと改めて感じました。

持続性を高めるためにどうすれば良いのかというのは、役場の中での議論だけではなくて、今回のワークショップのような町民の方の意見も取り入れながら、一緒に議論しながら作り上げられていくと、素晴らしい庁舎になるんじゃないかなという気が致しました。

まだまだ議論したいことはあります。例えば二宮町らしい庁舎設計とは何かで、大きい自治体で出来る事は小さい自治体で出来ない事もある一方で、逆もあります。恐らくこれも重要なポイントなので、計画設計をしていく時に考えて頂きたいと思います。

それから先程の、いろいろなものを複合させることで1+1が2よりも大きくなっていくというところで、ここはそれが可能な場所のような気がします。もう一皮外側を見れば、一般の町が広がっていますので、そこの連続性も考えて、全体として更に1+1を2よりも大きくしていく、町づくりの観点から庁舎のことを考えていくということも議論を深めていきたくったなと思っています。

最後に新庁舎への期待ということで、町民パネリストの方と専門家の先生に一言ずつお話を頂きたいと思います。

(町民パネリスト) スマホ一本で手続きが可能になるといったところのICTの技術も向上して欲しいし、二宮が遅れているとは言われたくありません。ですが、それだけでは解決出来ないことがあるので、やはり対話を必要とするところで、職員の皆さんに相談しながら解決を目指して頂きたいです。基本的な業務をして、やはりワクワクするような楽しいような庁舎であると魅力的ですし、二宮らしさを出した庁舎を期待しています。

(町民パネリスト) 井上先生のお話にもありましたが、参画している意識を上手く醸成していけたら、良いものが出来るのではないかと期待しています。それから、以前住んでいた自治体ではこのワークショップのようなものはあり得ないことだったと思うので、少しでも自分の声が届くという感覚は大事だと感じています。

小さい町のようにも人口がそれなりにあるので、全部の声を拾い上げることは大変だと思いますが、井上先生のお話で、それもデジタル化でやりやすくなっているとありました。特に若い人たちはアイデアをたくさん持っていると思うので、そういう人たちの声を聞きながら年配の方々の意見も上手に取り入れられるような仕組みを回して頂ければと思います。

(町民パネリスト) 閉じた建物というイメージではなく、どうやって開けるかです。それは職員の働き方や意見も含めて背負って閉じるのではなくて、先程のデジタル化も含めて機能としてもっと軽やかに出来るのかや、そこに持ち込んで仕事をではなくてタブレットを持って現場に出かけるとかや、地域で話を聞く等といったものが展開できるような、そういうイメージです。抽象的ですみません。

(加藤先生) 開かれたという、設計する時に非常に重要なキーワードになってくる気がします。

(町民パネリスト) 大袈裟なことは求めないので、次の未来の世代に対して、あまり苦勞を残したくないという気持ちがあります。A班以外のパネルを見てみても、コストに対する視点が厳しくて、たぶん皆さんも負の遺産を残さないようにしようということで、かなり真剣に考えているところがあるのかなと思いました。私もそういう気持ちもありますので、やはり将来の人が困らないような、幸せになれるような庁舎になれば良いなと思っています。

(町民パネリスト) 他の人に誇れるようなものを期待しています。例えば二宮に何があるのかと聞かれて、西友や交通の便が良い等というのではなく、良い庁舎があって、人が集まって、近くに公園もある等といった明るいイメージのある、そういうものが伝えられたら良いなと思っています。

(加藤先生) ありがとうございます。昔からお国自慢出来ない地域というのは、全く持続性が無いので、お国自慢の一つの素材として、きちんとした未来になれるようにしたいという期待かなと思いました。

(井上先生) いろいろな人が考えたことが、少しでも反映されれば良いと思います。小さな町だから町民が参加出来る、行政との距離が近くて良いというより、意外と町民の声が届かずに、諦めている人の方が多いのかなという感じがしています。

せっかく庁舎を建て替えるのであれば、庁舎を建て替えるプロセスにおいて皆さんが参加できたり、皆で作りに上げていく庁舎になっていく等、それだけではなくて、その後の運営のプロセスにおいて町に皆が参加できる意識をもって、参画を通じて愛着を持てるような、そういう庁舎になったら良いなというのがあります。

もう一つは、二宮町は本当に貧乏です。お金持ちが多いのに貧乏な理由は、二宮町にお金が落ちる仕組みが全くないからです。サラリーマンのベッドタウンになっているので、所得自体はそれなりにあっても、その半分が全部町外で消費されています。地域循環率は神奈川県でも最低の金額です。なので、地域の中でお金を使える仕組みを作る、或いは無駄なことを外に出費しないで町民の力でやる等、そういうことで地域にお金がたまる仕組みを作っていないと、この庁舎を造ったということが負担になります。貧乏で更に人口減少で税収が減る中で、どうやって維持していくのかというと、やはり地域で稼げるようにならないといけないので、稼げる年代の人に来て頂かないといけないし、その人たちがお金を落とす場を作っていないとダメです。そうしないと、この町は貧乏なままです。

(加藤先生) かなりショッキングな発言でしたが、そうなのですね。そういう現実も見据えながら、未来に向けての不連続なジャンプを期待したいと思います。

(山崎先生) 町民としての立場でコメントをさせていただきます。ワークショップを通して、愛着、或いは人が優しいという言葉が非常に印象に残りました。いろいろな年齢構成・属性の方がいらっしゃると思うのですが、私も二宮町に移って 20 年以上になります。何故二宮に移ってきたか、何故そこに住み続けるのか、その時にやはり美しい自然があるからだと思います。自然との身近な生活体験が出来るのは、大人も子どもにとっても良い町だなと思います。

そういう環境の中でどのような未来志向の庁舎を造るかですが、もしかすると庁舎ではなくなってしまいかもしれませんし、新たな居場所になれるような公共のシンボルかもしれません。海外の民間のオフィスはどんどん変わっています。行政の機能もデジタル化と共に必要なものだけが残って、新しい機能が生まれるかもしれません。この二宮で最先端の働くワークスペースとは何かということです。ただ椅子に座ってではなく、新しい仕事の関わり方もあるのかなと思います。

今まで縦割りに造られてきた施設に対して、再編が求められているということは、横断的な機能やマネジメントみたいなものがやはり真に求められているのだろうなというふうに感じました。

別件ですが、オリンピックを前に国の施設の中で、トイレの LGBT 対応の問題が議論されています。(LGBT 対応のトイレをどう作るべきか?) これは性差の問題も含めて、どういう形で考えていくかということも非常に大きな問題です。大手町のテレキューブ(レンタル個室ブース)を利用した時、新しいテレコミュニケーションのようなスタイルができたと感じたので、このような個への対応も一つあるのかなと思いま

した。

(加藤先生) 改めて二宮町の予算の見直し、分野横断で施設をトータルで考えていく、未来に向けて変われる仕組みが重要、今まで扱われていなかった LGBT 等についても配慮が必要だということかと思えます。

最後に、今後どのような展開で議論を進めていくのかについて、部長の方から簡単にご紹介をさせていただきます。

(政策担当部長) これまでは、このワークショップとシンポジウムを通じて基本計画という形でまとめていきたい、ということをご説明しておりました。一方で、このワークショップを通じて、やはり我々は公共サービスを公共施設としてどのように提供するかという視点に偏っていたのかなということが大きな気付きだったと思います。

ワークショップにご参加して頂いた皆様のご意見は、やはりまちづくりに対するご期待というのが大きいのかなと感じましたので、まとめ上げるのにはもう少し時間があるのかなと思いますが、出来るだけ早く形にして、皆様にお見せできるように努力していきたいと思えます。

(加藤先生) どうもありがとうございます。この庁舎計画がスムーズに前に進まなくて本当に良かったなと思えます。もし進んでいたらこういった議論も無く、二宮町の現実も知る機会もなく、未来を真剣に考えるきっかけもありませんでした。

是非、このきっかけをプラスに生かして、更に議論が深まることを期待したいと思います。これにてパネルディスカッションを終了したいと思います。皆様、どうもありがとうございました。